

余話 新劇人に向けた西園寺公望の激励

―激動する政局と元老の去就―

その一

築地小劇場において結ばれる東屋三郎と岸輝子は、元老西園寺公望の近親である。夫妻と元老の親睦の背後には、大正から昭和にわたる政治的激動と新劇の興隆があった。

東屋はつとに多年の俳優歴を有し、大正七年踏路社の公演『幽霊』によって青山杉作とともに嘱望されていた。その後両者は大地震の前後わかもの座や第二芸術座の活動に係わり、やがて築地小劇場の創設に参加。東屋は築地小劇場柿落しの三演目、『海賊』・『白鳥の歌』・『休みの日』、および第二回公演『狼』のすべてに出演した。

この男優は維新政府の外務書記官、光妙寺三郎の子息である。長州藩より派遣され、パリに留学した光妙寺はその地で西園寺公望と交誼を結んだ。帝国議会議員にも選出されながら、不遇のなかで逝去し、遺児東山を西園寺が養父として引き取った。^① 西園寺による養育と情愛の様子は、東屋の伴侶岸輝子の回想を通し伝えられる。

① 福井純子「光妙寺三郎―その人と足跡」『立命館言語文化研究』第四巻第四号（一九九三年二月）

東屋三郎と西園寺公望（岸輝子『夢のきりぬき』）

三ちゃん（東屋三郎）は自分の父も母も誰なのか本当に知ってはいなかった。けれど私には、母は日本最初の女優の千歳米波で、父は光妙寺三郎だと教えた。・・・光妙寺三郎はフランスで西園寺公爵と知り合い、公爵が帰国した後もずっとフランスにとどまっていた。・・・

三ちゃんは橋本実斐さんと一緒に西園寺家に預けられ、二人とも仏英和女学校の付属幼稚園にはいった。女の学校に男の子が二人入ってきたので大騒ぎだったらしい。それから暁星を経て、実斐さんは帝大に、三ちゃんは慶応に入った。卒業すると就職先は定められてあったので、自分で大阪商船にはいった。ところが希望していた外国航路は、西園寺家からさしとめをくったので、大阪商船をやめ、第一志望だった俳優に敢然となつてしまった。・・・

三ちゃんは私にいつも言っていた。おじい様（西園寺公爵）は誰よりも僕が一番可愛いだって。そしてそんなとき、子供の頃のいろいろを話してくれた。西園寺家では中学に入ると、お膳にお銚子が一本ずつくんだって。公爵が待合へ行くとき、よく三ちゃんを一緒に連れていったことや学校の夏休みや冬休みのときは、三ちゃんと一緒に連れて田舎へ行ったこと、三ちゃんは毎日馬に乗って遠出をするので、お前は毎日金を使い過ぎると叱られたこと、ある日馬がふいに何かに驚いて飛び上がったって走りだして死ぬ思いをしたことなど。・・・

私と三ちゃんは夏は御殿場に、冬は興津におじぎにいった。私が初めて西園寺公爵にお目にかかったのは、御殿場の別荘だった。今日何時に伺いますと電話すると、その時間に駅まで公爵家の自動車が迎いに出る。

それに乗らないと、憲兵が立っていて門内に入れないのです。

公爵はとても優しいかたで、築地小劇場の話をし、土方はえらいとおめられたので、私はとても嬉しかった。そのときマルクスの資本論のお話をなさったので、私はえらい方だと思って好きになった。お土産にフランスの香水を下さった。公爵はとても質素な生活をしてらして、私はよいおじい様だと思った。

御殿場には東山（千栄子）さんの別荘があり、それから立命館大学の総長の中川小十郎さんの別荘もあった。ある夏東山さんと二人でおもちをついていた。ところがとても出来が悪く、米がぶつぶつしたボロボロのおもちが出来上った。でも私はショートパンツで自転車に乗り、さっそうと中川家に伺った。一寸不出来ですが私のついたおもちですから、と差し上げたら、奥様が十円下さった。エビタイ、エビタイと大喜びで東山さんにヒラヒラ振って見せた。

中川小十郎さんは公爵家の奥むきの秘書のような方で、三ちゃんと私は一方ならぬお世話になった。三ちゃんが死んで京都の西園寺にお骨を納めたときも、みんな中川さんがしてくださった。私には忘れられない方なのです。①

関東大震災のとき西園寺は御殿場の船塚別荘に居合わせ、竹藪に逃れて難を免れた。多くは興津坐漁荘元老を訪ねる東屋・岸夫妻が、夏には船塚別荘に滞在する。御殿場には元老の側近、中川小十郎や築地小劇場の同期、

① 岸輝子著『夢のきりぬき』八一〇、一二頁。

東山千枝子の別荘もあって、桑畑と桜の園を眺める東山家の庭が交遊の場ともされた。①

養子夫妻との歓談で元老からまず語られるのは、もとより光妙寺三郎の想い出であろう。異国における光妙寺との出会いについて西園寺は、かねて一句の漢詩を綴っていた。『明治文学全集』に収録されるこの作品は、日清戦争のあと外務大臣の任を終え、フランスを再訪したときに詠まれた。明治三十年遺児東屋は五歳の頃である。その十年後日露協約を締結し、総理大臣の座から退いた彼が、光明寺との交遊を誌した一文もここに併記する。

西園寺公望「星旗楼題壁」（筑摩書房『明治漢詩文集（明治文学全集）』）

星旗楼題壁。二十年前。予与光妙寺三郎飲此楼。三郎有詩景琴情奈我伺之句。

今再之過。不禁嚴然。因作二十八字。

琴情詩景夢茫茫 二十年前旧酒場

無数垂楊生意尽 傷心不独為三郎

②

西園寺公望「如何なる是れ風流」（『陶庵隨筆』）

余巴里に遊学せし時、一夕星旗楼に飲す。先きに一客あり、釵光燭光影杯狼藉、余は其の光妙寺三郎なる

① 東山千栄子著『私の歩んだ人生』一〇八一―一二〇頁。

② 岩井忠熊著『西園寺公望―最後の元老』岩波書店、二〇〇五年。三八―三九頁。

をけれども、未だ親近の人たらざる時なれば、知らぬ様して堂の一隅に座を占めて独酌す、既にして彼の視線は数々余の方に向ひしが、突然起て余の前に来り曰く、如何なる具れ風流と余声に応じて曰く、執拗是れ風流と、余の意、実は諷する処ありしなり、彼れ浩然大笑して余の手を執て曰く、真に知己なり、乞ふ今より交を訂せんと、是れ余が彼と友たるの初めなりき、今を距ること三十年に近し、而して三郎の墓木も亦己に拱す、而して余の意は猶昨日の如し。①

新劇人たる夫妻を前に西園寺は演劇との係りをも話題とし、築地小劇場の活躍についても尋ね、土方与志の壮図を称讃した。若き日はパリ留学においてしばしばオペラや演劇に接し、当地の劇壇にも関与したのである。昭和十二年西園寺の内室小林菊子からなされた聴き書きには、そうした秘話が含まれる。

西園寺公望とパリの劇壇（安藤徳器著『園公秘話』）

公がパリに上陸第一歩を印した時、あたかもコンミュン党の叛乱が起っていたが、リュウ・ド・バック街の下宿からちよいと芝居や寄席を覗かれた。エミール・アコラスの門下となつてからも当時一流のオペラ街、カフェ・アメリカンにも出入りして、クラマンソーやフロツと相識つた。

オデオン座観劇の帰るき、マンデエズ夫人―ジュディット・ゴオチェに紹介されてから文豪ゴオチェのサ

① 西園寺公望著・国木田独歩編『陶庵随筆』新声社、一九〇三年。四六一―四七頁。

ロンに出入りして、当時の文人墨客と交遊した。・・・翰林院女学士ジュディット・ゴオチェと古今集の逐次訳『蜻蛉集』を出版し、『笑いとひさぐ者』なる脚本をオデオン座に上演するなど、陶庵公はパリの華やかなる芝居裏にも通曉していた。

十間四方馥郁たる香水の薫りに、パリジャンを煙に捲いた和製伊達男光妙寺三郎は、マンデエズ夫人の若き燕であつたが、『忠臣蔵』を仏語に翻訳した脚本が、その遺児東屋三郎の処に秘蔵されてあつた。が、惜しいかな大正震災で焼失した。・・・

明治政府が遊蕩児視していた陶庵公のポケットには、自由思想のマッチが秘められていたとは？ 陶庵公の師匠が有名な社会主義者であり、マルクスも公を訪うたとさえ伝えられている。①

日本における新劇勃興と西園寺との係りも深い。明治十九年革新の先駆とされる演劇改良会が外山正一・洪沢栄一の後援によつて結成され、これには大隈重信等と共に彼が賛助者に加っている。② また、明治四四年帝国劇場の開場式には、会長洪沢栄一の演説に続いて、総理大臣桂太郎、西園寺公望公爵、尾崎行雄東京市長等の祝辞が述べられ、そのあと史劇『頼朝』、喜劇『最愛の妻』、舞踏『フラワー・ダンス』が演じられる。③ 当日病

① 安藤徳器著『園公秘話』育生社、一九三八年。五七一―五九頁。

② 伊原敏郎著『明治演劇史』早稲田大学出版部、一九三三年。三八六―三八八頁。

③ 帝国劇場「第九回報告書（明治四四年）」『洪沢栄一伝記資料』第四七巻、三八四頁。

気休養中の西園寺については、開場で祝辞が代読され、その後銘板に刻まれて玄関正面の壁に掲げられた。

西園寺公望「帝国劇場開場へノ祝辞」

本日帝国座ノ開劇ヲ報ゼンガタメ縉紳淑女ヲ招待セラルルニ際シ余モマタ参同ヲ促サレタリト雖モ宿痼猶才癥ヘズ床中ニアルガタメ式場ニ列スル能ハザルハ甚ク遺憾トスル所ナリ 蓋し人心を和楽セシメ風俗ヲ醇化スル所以ノモノ一ナラズと雖も芸術其多キニ居リ芸術ノ中演劇ハ其示ス所耳ニ潤ヒ目に染ミ深ク民心ニ浹洽スルヲ以テ其効果最モ直接ナリトス 然ルニ從來我士君子多ク演劇ヲ以テ児女ノ楽トナシ之ヲ省ミザルヲ偉ナリトスルモノナキニアラズ 然レドモ善政ハ人情ニ基キテ民心ヲ調節ス演劇ノ一道直チニ経国ノ政術ト云フモ過言ニアラズ 今茲ニ宏大ナル抱負ヲ以テ起リシ帝国座ガ漸ク其幕ヲ開クニ至リシハ余ガ列席ノ諸君子淑女ト共ニ慶賀シテ已む能ハザル所ナリ 然リト雖モ帝国座ノ抱負ヲ遂ゲンニハ演劇当局ノ苦心ト世間公衆ノ同情ト識者ノ批評トニ俟タザルベカラズ 余ハコノ三者相合シテ帝国座ヲシテ清新崇高ナル趣味ヲ涵養スル源泉タラシメンコトヲ切望シ遙カニ数言ヲ寄セテ今日ノ盛会ヲ祝ス

沼津ニ於テ

明治四四年三月四日

西園寺公望

①

西園寺は帝国劇場の設立に発起人として参与するのみならず、女優の養成を不可欠とし、新劇の道を志すよう

① 帝劇史編纂委員会『帝劇の五十年』一五五頁。

梨園の女性に所望した。川上音二郎・貞奴の養成所に先立って、先駆的な激励がなされた事実が、『帝劇十年史』には誌される。

西園寺公望 女優養成の所望（『帝劇十年史』）

侯爵西園寺陶庵氏はただに帝劇創立の恩人たるのみならず、また吾新女優の（助産婦）也。（吾人は侯が大海の度量を以ってこの綺語を寛恕せらるべきを信ず。）明敏なる侯は吾劇壇が近き将来に於て女優を要求すべきを看取し、先ず九代目団十郎の遺子に慫慂して曰く、「帝国座の建設も近きにあり、卿等須らく新女優の急先鋒たるべし」と。ここに於て実子富貴子の姉妹は翠扇旭梅と号して梨園の人となり、現左団次の実妹幸子（松蔦）及び河原崎権之助の女貞子（紫扇）と共に新女優として奮起し、明治座に『ベニスの商人』を演じて其披露興行を行へり。時に明治四一年一月也。①

なお、明治四十年より総理大臣西園寺公望は、雨声会なる文芸サロンを設け、幸田露伴、森鷗外、泉鏡花など二十余名の文学者と数次歓談した。これには坪内逍遙も招かれたが、夏目漱石と同じく参加を辞退する。「選から洩れて残念がった者もいるが、総理大臣の招待を辞退して見識を示した文士もいる。坪内逍遙、二葉亭四迷、夏目漱石という当時の大家である。『当世書生気質』で世に出た逍遙は、シェイクスピアの翻訳家として知られ、

① 杉浦善三著『帝劇十年史』一一九頁。

戯曲『桐一葉』で戯曲家としての地歩を固めて紅露追鴟と並び称され、三十七年から四十年にかけて『新曲浦島』『新曲かぐや姫』『常闇』『お夏物狂ひ』などの舞踊劇を発表して精力的な活動を示していた。」① 後年築地小劇場において逍遙作『役の行者』の重要な役を、東屋三郎と岸輝子が担うことはさきに述べた。

その二

西園寺の著名な別邸坐漁荘は、温暖な駿河の興津に大正八年竣工した。加えて夏季を過すべく、御殿場に船塚別荘が設けられるのはその三年後である。大震災の翌年松方正義が逝去したあとは、天皇を輔佐する唯一の元老として西園寺は、相次ぐ政変のなかで大正十四年一月に清浦奎吾を、同年五月には加藤高明を首相候補として奉答する。便船塚別荘と坐漁荘には政界有力者の来訪も多く、厳重な警備が敷かれていた。静岡県警察部編集の稀覯本『西園寺公爵警備沿革史』は入手困難であるが、増田壮平著『坐漁荘秘録』や松本清張の短編「老公」によって、元老別荘の歴史と模様はかなり把握できる。

坐漁荘では当初江尻署から私服の警官一名が派遣されて詰所で待機し、来客を出迎えるとともに、外出に際しては追隨した。原敬が暗殺された大正十一年から警備の体制は主任以下九名に強化される。昼夜交代でうち一名は正門に、他の一名は裏海岸付近に立哨したとされる。

別荘訪問者一覧には、東屋三郎・岸輝子夫妻が訪れた頃、大正十五年のそれも含まれる。政界等の有力者とし

① 豊田穰著『最後の元老西園寺公望』新潮社、一九八二年。上巻、二四〇―二四二頁。

ては、近衛文麿（公爵）、水野練太郎（前内務大臣）、内田康哉（前外務大臣）、徳川家達（公爵）、鳩山一郎（代議士）、床次竹次郎（政友本党総裁）、田中義一（政友会総裁）、原田熊雄（総理大臣秘書官）、加納治五郎（講道館長）、一本喜徳郎（宮内大臣）、入江寛一（侍従長）、若槻礼次郎（総理大臣）、竹越与三郎（貴族院議員）、幣原喜重郎（外務大臣）、姉崎正治（文学博士）等々。これら地位ある来訪者には、警備主任からの連絡で、熊谷執事が門前に出迎えて応接室へと案内し、他は玄関先で名刺を受け取って帰された。なお、この一覧によれば、新劇女優の先駆川上貞奴も福沢桃介とともに大正十二年十一月元老を訪れた。かつてフランス留学中に西園寺は、日本芝居の演技を実見したいとの劇壇の希望で、パリに滞在する貞奴を紹介した故事がある。①

西園寺の邸宅は四カ所にあり、東京の駿河台の本邸、京都の別荘清風荘、興津の坐漁荘、御殿場の船塚別荘がそれである。たとえば、大正十五年西園寺は元旦を坐漁荘で迎え、四月二十日東京の本邸へ帰った。ついで七月三十一日御殿場へ移り、九月十五日から秋は京都の清風荘で過ごす。その年て興津での閑居に復するのは十一月二五日である。別荘における西園寺の日常については、『警備沿革史』に含まれる警備主任梅川五郎の記録が詳しい。

坐漁荘における西園寺公の日常（「警備主任梅川伍郎の回顧」）

① 増田壮平著『坐漁荘秘録』静岡新聞社、一九七六年。一六三、一八八―一九二頁。

公の日常は今も昔も余り御変りはないと思いますが、真に変化のない単純な生活で、私等から見れば毎日退屈なことだろうと思いました。毎日来客以外の時は、朝はかなり長い間新聞を見て、それから毎日の様に沢山の手紙を披見して返事を書いたり、今はあまり揮毫も書面も書かない様ですが、以前は時々揮毫をしました。之は必ず夕食後の夜間にやりました。墨は私共がすりしましたが、とても固く二、三時間はすりしました。其の他は書見をしたり、時々ボツネンと海岸を見て居ったり、小鳥の鳴き声を聞いて居ったり、一人でトラップをやったり、ラジオを聞いたりする様なことが日課でした。

朝は老人にしては遅い方で七時以後に起床し、夜も又遅い方で十時頃に就寝しましたが、時には枕電灯を付けて床の中で書見をすることもありました。又身の具合で夜中の一時か二時頃に女中を呼んで、薬を飲む事もありました。身だしなみのよい方で、毎朝自ら安全カミソイを使い、鬚も釣りひげで、とても濃い方ですが、ひげをのばしていたことがあります。お湯が好きで每晚必ず入浴し、また酒は若いときは強かったそうですが、この当時は昼に生葡萄酒をコップに一杯、晚には日本酒を小徳利に一本やりました。白鶴が好きで飲んで居りました。糖尿で飯はやりません。朝トースト、昼は夕と同じくパン二、三切と砂糖を用いない料理をやりました。食事はチビリチビリ聞こし召して三十分以上、一時間近くかかりました。①

やがて大正から昭和に改元され、相継ぐ政治の激動が坐漁荘での閑静をも揺がすに至る。大正十三年衆議院選

① 「老公」『松本清張全集』第六六巻、一九九六年。第六六巻、一三一―一四頁。

挙で勝利した憲政会加藤高明が内閣を組織し、普通選挙法を成立させる。以後衆議院での多数政党が組閣する（憲政の常道）が八年間七代にわたり続いた。しかし、昭和七年大陸への侵攻は満州国の建設と第一次上海事変へと拡大し、政党内閣と軍部との対立が深刻となる。同年五月十五日総理大臣犬養毅は青年将校らのクーデターにより暗殺され、内大臣牧野伸顕も襲撃された。これなる五一五事件の経緯と後継内閣に係わる元老西園寺公望の奉答については、昭和政治史の第一級史料、内大臣府秘書官長木戸幸一の『日記』を参照する。なお、内大臣府は宮内省の外局として、天皇を常に輔弼し、宮廷の文書を管理する機関であった。

五一五事件と西園寺公望（「昭和七年」『木戸幸一日記』）

二月二十六日（金）曇後晴 午前九時半、近衛公を其の邸に訪う。公より一昨日、興津に於て西園寺と会見の様様につき話あり、其の要領は左の如し。

西園寺公の御考えは、昨今の政界の動向は漸次公が予て考えて居られ期せらるるところと相反する情勢に進みつつあり、仮りに政変等の場合に於て、後継組閣者に軍人を御推選申上ぐるが如きことは、到底自分の忍びざるところにして、今にして慎重考慮の上決意するにあらずんば、恥を後世に残すに至らん、よつてこの際元老たるの優遇栄爵を拝辞したく、尚慎重の上にも慎重に考慮を廻し居るが、右につき公にも其の意見を求められたので、余りの突然なる話の為め即答も出来ず、数日考慮の上御返事することにして帰ってきた。

・ ・ ・

五月一五日（日）晴 当初は内大臣邸のみと思っていたところ、同時刻頃に警視庁、政友会、日本銀行等

も襲われたることが判明、そのうち総理官邸も襲われ、かつ総理は面会してピストルにて頭部を打たれ、重態とのことが判明したので、ここに本件は政変を将来するのおそれあることが明瞭となり、容易ならぬ事態なることを知るにいたった。

犯人は海軍将校五名、陸軍士官候補生十一名、他一名計十六名にして、麴町憲兵分隊に自首して出たとのことだ。宣言書のごときものを配布したが、右は政党並びに側近は腐敗し居るを以て、現状を打破し、堅固なる組織をなすの要ありとの意味のものだ。

午後八時二十分に犬養総理大臣の遭難に対し、侍従・侍医の御差遣あり。・・・十一時に総理官邸に横溝書記官を訪い、見舞を述べて帰宅す。十二時頃床に入ると間もなく、岡本侍従より電話あり、十一時二十分に犬養総理は遂に薨去せられ、準備出来次第総理の親任式を行わせらるることとなりし故、直ちに出勤の旨を通ず。

五月十六日(月) 晴 二時四五分内奏を終り、同三六分高橋大蔵大臣に対し臨時兼任内閣総理大臣の親任式を行わせらる。市内の警備は戒嚴令を布くに至らざりしも、補助憲兵四五〇名を出動、警備に就かしめた。午後三時に帰宅、少時休息の後午前七時に井上侯を訪問、今回の事件に対する軍部の動静について意見を聴く。同君の意見は大体今日のところ昨以来の事件にて別段の動揺も見ず、ただ今後の時局收拾につき後継内閣の組織等に就ては充分の決心と熟慮を要すべく、所謂憲政の常道論により單純に政党をして組閣せしむるが如きことにては、軍部は収まらざるべしと思わるとのことだった。

一旦帰宅す。興津の原田と電話にて話す。西園寺公の御上京の必要の当然生ずべきことを述べ、其の準備を促す。九時出勤。午前十時より内閣は閣議を開き、総辞職を執行することに決し、高橋総理参内、辞表を

捧呈す。

西園寺公御召の御沙汰あり、侍従職より河合属を派遣、侍従長の公宛書面を伝達せしむ。・・・

五月十九日(木) (西園寺) 公爵は本日午後四時五五分東京駅着帰京せられ、五時より五時半の間に於て侍従長は公爵を往訪せり。・・・

今回の陸海軍将校の行動は必ずしも盲目的と見るを妥当せず、之は窮状になやめる農村の子弟に直接接触せることにより感化せられ、既成政党の墮落、財閥の横暴等に憤慨したるものと解すべく、即ちこれ一の社会問題と解すべきを至当とす。若しこの見解にして誤りなしとすれば、本問題の解決はよって来るところ深きだけに、簡単に解決し得べきものにあらず。之が解決の方式としては、この際政党も軍部も共に相協力して当たるを最も当然とすべきも、軍部の政党否認は感情的にまで進展せりこと故、両者の提携は困難なりと思わるる。然らばこの際暫く両者を引退せしめ、ここに第三者たる公平なる有力者を出馬せしめ、この事態を預かりて前後処置に任せしむもまた一策にして、これがもつとも実行的なりと思考す。・・・

五月二十日(金) 晴 午後後二時に内大臣は西園寺公を再び訪問せらる。三時過ぎに再び登庁せらる。元老との間には大体御意見の一致を見たるものの如く、非常に御機嫌がよかった。小野秘書官に中川氏が語りたる秦憲兵司令官の談は左の如く、相当公の御身辺は心配している様子だ。

目下青年将校の上京せるものは、あまり多数には非ざるも、いつでも上京し得る様になれるは、青森、奈良、岐阜、大阪、京都等の地方なりと言う。上京せる将校を検束することは犯罪にあらざれば困難なるも、元老の参内奉答の際及び大命降下の際が最も危険なれば、万一の場合には彼等を検束する手配をなしおる由にして、元老参内の連絡方を希望せりとのことなり。

五月二日(土)

曇 午後一時三五分西園寺公参内せられ、内大臣室に於て内大臣、宮内大臣、侍従長と会談せられたる後、午後二時五分より二時十五分迄拝謁、後継内閣の組織につき御下問に奉答せらる。

その結果、斉藤子爵を御召の手続をとる。岡本侍従、侍従長の手紙を持参、葉山に滞在中の斉藤子を訪問、伝達することとなる。・・・斉藤子は午後四時三五分葉山を發し、六時十分一旦帰宅し、六時四五分参内せられる。

六時五一分拝謁。陛下より卿に組閣を命ず、時局重大なるときなれば、奮發事に當らむことを望む、と云う意味の御言葉あり。斉藤子は、大命を拝することは少しも予想致しませず、従つて何等準備もございません。而し只今優渥なる御詔を拝し、極力内閣の組織に當る考えでございますが、種々複雑なる事情もございますので、数日の御猶予を願ひ奉ります、との意味の奉答をなし、御前を退下す。ここに一週間にわたる政変も一段落を告ぐるに至った。①

ついでその四年後、同じく青年将校によるクーデター、二二六事件が勃發した。一九三六年二月二六日の朝陸軍皇室派の青年将校等千四百余名は蜂起して、首相官邸、蔵相私邸、警視庁、新聞各社を襲撃した。総理大臣岡田啓介は辛くも難を逃れたが、これによつて大蔵大臣高橋是清、内大臣斉藤実、教育總監渡辺錠太郎等が殺害される。湯河原では別荘光風荘に滞在する牧野伸顯が航空兵大尉河野寿ら七名に襲撃され、孫にあたる吉田(麻生)

① 『木戸幸一日記』上巻。東京大学出版会、一九六六年。上巻、一四三、一六二―一七〇頁。

和子の機敏な介助で裏山へ脱出できた。① 内大臣遭難に接した木戸幸一は、ただちに坐漁荘へ電話して、西園寺公望の無事を確認する。

立命館大學は自由主義を校風として西園寺により創立された学園である。初代の総長中川小十郎は、元老の側近として頻繁に別荘を訪ね、私的な参与を勤めていた。二六日の朝いち早く坐漁荘へ駆け付けたのは彼である。

二月二六日坐漁荘の朝(木村毅著『西園寺公望伝』)

親子二代つづいて元老西園寺公の側近にあつて、影の参謀長役をつとめている立命館総長、貴族院議員中川小十郎翁は、二・二六事件の突發せる前夜、元老を訪問すべく京都の邸を出でて、この日の未明興津の一碧樓水口屋についたばかりであつた。

午前六時ごろである。一瞬部屋付きの電話が發狂したようにけたたましく鳴りひびいた。「早く来て下さい!早く!」公爵邸からである。翁は受話器を下ろして、そのただならぬ電波の声に、公爵の身邊に容易ならぬ重大事件が起きたのではないかと驚愕し、とるものも、とりあえず公爵邸に駆け付けたのである。水口屋と西園寺公望邸坐漁荘は目と鼻のところであるが、邸まで疾走して行く自動車の時間が、どんなに長く感ぜられ化、この時の中川翁の胸中では想像にかたくない。・・・

中川翁は公爵邸に入り、はじめて帝都に起つた事件の外貌を知り、先ず元老西園寺の無事なるを喜んだ。

① 麻生和子著『父吉田茂』新潮社、二〇一二年。一〇二―一〇八頁。

公爵邸では突風の如く捲き起った帝都の事件の重大なる性質に、周囲の人々は公爵の身边に就いて非常に心配していたが、公爵は平素と変わりなく定時の朝食を済まし、居室にあって、吹雪にかすむ駿河湾を静かに眺めていた。けれどもこの時、老公の心の眼は、怒濤の如くさかまく時局の激動を凝と注視していたに違いない。

公爵の居室に招かれた中川翁は、時機奉伺をはじめ、その他の善後処置について打ち合せたのち、身边の危険を案ずるままに、しばしその居を移動されんことを申し出たが、公爵は「自分のからだは君等にまかせる。けれども自分の住所はお上に静岡県興津町とどけてあるので、軽々に長く居を移動すると云うわけには行かないのである」との凜然たる一言を放って、側近者を感激させた。①

中川の助言によつて午前七時過ぎ、八六歳の西園寺は雪模様のなかを三台の警備自動車に護られて、静岡県警察部長官舎へ避難した。午後八時にはより完備した知事官舎に移動し、百数十名の警官が警備を固める。しかし、最後なら坐漁荘で、と念じて翌日の午後帰宅し、六五名の警官と六名の憲兵で身边を警戒された。②

鎮圧への奉勅が下されて、叛乱軍は蜂起の三日後戒厳司令部へ投降し、後継内閣について西園寺に下問がなされる。三月四日拝謁した彼の奉答を受けて、総理大臣への大命が広田弘毅に授けられた。外交官であった広田は、

① 木村毅著『西園寺公望伝』沙羅書房、一九四八年。三四〇頁。

② 増田壮平著『坐漁荘秘録』八〇―八五頁。

齊藤実内閣および岡田啓介内閣の外務大臣として諸外国への協和的な政策を進めつつあった。

二二六事件と西園寺公望（「昭和十一年」『木戸幸一日記』）

二月二十六日（水）雪 午前五時二十分、小野秘書官よりの電話なり市川の声に夢を破らる。直ちに電話に出しに、内大臣は只今私邸にて一中隊の兵に襲撃せられ、奥様もお二人共いけない様ですとのことなり。右は齊藤家の書生よりの電話なりと。一大不祥事の発生を直感し、直ちに警視總監に電話をかく。通話することを得たけれども、警視庁の手配については要領を得ず。よつて役所より自動車を招き、午前六時参内す。自動車を待つ間に、近衛公、原田男に通知す。何れも未だ知らさりき。

午前六時四十分頃、興津の西園寺公邸に電話を以て事件を御知らせす。公爵はじめ一同未だ御休み中との女中の返事にて、大いに安心す。

直ちに常待官室に至る。湯浅宮内大臣、広幡侍従次長等既に在り、侍従長、岡田総理、高橋蔵相等も襲われたことを知る。・・・

二月二十九日（土）曇 二時、本庄武官長より、叛乱軍は大体片付きたる旨奏上するところあり。依つて侍従次長は枢相、宮相と協議の上、陛下に西園寺公に御下問相成可然哉を伺い奉る。御嘉納あり。依つて侍従次長より電話にて原田男を通じ西園寺公に「後継内閣の組織に就いて御下問相成度思召につき御出仕出来得るなれば出仕相成度、尚今回は如斯際なれば御使を出すことは省略し電話にて御伝えず」と伝う。

午後三時半、原田より電話あり、「西園寺公は御沙汰拝承致しました、何分腰痛がございますので、暫く

「ご猶予の程を御願ひ申し上げます」とのことなり。よって侍従次長は陛下にこの旨を言上したるに、陛下には身体を大事にしてなるべく早く上京する様にとの御沙汰あり。

三月二日（月）晴 三時三五分、西園寺公宮内省に到着、次官室の宿舎に入らる。小憩の後、御都合を伺い拝謁せらる。これより先二時頃牧野伯も参内せられ面談す。老公とも面談せらる。……

三月四日（水）晴 午前九時半、西園寺公は近衛公を呼ばる。近衛公は十時十分来庁、元老と約一時間面談せらる。続いて召されて余は近衛公より現下の情勢を聴から、首相としての奮起を勧められたる様子なりしが、近衛公は健康の到底堪え得ざるを理由とし固辞したる由にて、余より真意をなお確かむる様にとのことなりき。よって直ちに近衛公と懇談せしが、結局健康上不可能なりとのことなり。その旨元老に復命す。元老は自分は陛下に対して良心に恥ずる奉答は絶対に出来ないからとの御話にて、心に深く決するところがあらる様な模様に見えた。……

二時二十分（西園寺公）参内、宮相と会談せられ、二時四八分より三時迄拝謁、御下問に対し奉答せられ、近衛公を推挙せらる。……三時五五分、近衛公参内、直ちに拝謁被仰付、大命を拝す。近衛公大命を拝し、御前を退下の後、直ちに第一休所に於て一木議長と面談、議長の熱心なる勧告にも不拘、健康の故を以て拝辞の決意を為す。……而し拝謁奉答の前に一応元老に謀らるるを可とすべしと話たる結果、近衛公は元老を宿舎に訪い決意を告げ、再び宮殿に帰り、五時三五分再び拝謁被仰付。……

八時、宮相より一木議長の思付きなるが、近衛公が辞退せられたりとせば、広田外務大臣は如何との話なり。余もまた確かに一案なりと信じたるを以て、八時二十分、元老を御訪ねして広田云々を御話して御意見を伺う。元老にも御異議なきを以て、近衛公に電話して広田説得方を依頼す。

三月五日（木）晴 午後元老は大角海軍大臣、川島陸軍大臣を招き、軍部の情勢を聴取せられたる後、三時二十分参内せられ、同二五分拝謁、広田弘毅氏を奏請せらる。三時二八分、元老は退下。直ちに本省の宿舎に帰らる。御召により広田外務大臣参内。同五一分拝謁、大命を拝す。①

こうして二二六事件で危難を免れ、元老の大任をも果したが、叛乱軍の密約には西園寺暗殺の計画が含まれていた。ヨーロッパ近代の教養を身につけ、立憲君主制の確立を念願する西園寺は、天皇の親政を求める国家主義者から、君側の奸としてかねて敵視されていた。つとに原敬の暗殺直後別荘の警備が強化され、昭和六年の血盟団事件と昭和七年五一五事件において、暗殺の標的に組まれる。

叛乱軍鎮圧後の三月四日、勅令を受けて陸軍省に特設軍法会議が設置され、四月二八日審理が開始された。判決によれば、起訴された百二二名のうち、首魁たる村中孝次・磯部浅一はじめ十六名に死刑の判決が下される。「内治外交共に萎靡して振わず」と『判決理由書』で襲撃の理由がまず解説された。「政党は党利に墮して国家の危急を顧みず財閥亦私欲に汲々として国民の窮状を思わず」「斯くの如きは畢竟元老、重臣、官僚、軍閥、政党、財閥等所謂特権階級が国体の本義に悖り大権の尊嚴を軽んずるの致せる所なりしとなし一君万民たるべき皇国本然の真姿を顕現せんがため速かにこれ等所謂特権階級を打倒して急激に国家を革新するの必要であること

を、（これらの被告は）痛感するに至れり。」① 以下同書より西園寺暗殺の謀議と執行中止に係わる部分を採録する。

西園寺公望暗殺の計画（『二二六事件判決理由書』）

（ロ）昭和十一年二月十八日頃夜村中孝次、磯部浅一、栗原安秀、安藤輝三及び亡元航空大尉河野寿は栗原安秀方に会合し襲撃の目標及び時期に関し謀議の上近衛歩兵第三連隊、歩兵第一連隊及び歩兵第三連隊の各一部の兵力を出動せしめて在京一部の重臣を襲撃殺害し別に河野寿の指揮する一隊を以て伯爵牧野伸顕を襲撃殺害し又豊橋市在住の同志をして興津別邸の公爵西園寺公望を襲撃殺害せしむること及び決行の時期を来週中とする等を決定し同月十九日磯部浅一は豊橋市に赴き対馬勝雄に東京方面の情勢を告げ相謀りて公爵西園寺公望襲撃殺害を確定せり。・・・

（ハ）同月二二日夜村中孝次、磯部浅一、栗原安秀、亡元航空大尉河野寿は再び栗原安秀方に会合し蹶起の日時及び襲撃部署等に付き謀議を遂げ同月二六日午前五時を期し同志一斉に蹶起することに決し且夫々部署を定めて総理大臣岡田啓介、大蔵大臣高橋是清、内大臣子爵斎藤実、侍従長鈴木貫太郎、伯爵牧野伸顕、公爵西園寺公望を殺害すること為し得れば宮城坂下門に於て奸臣と目する重臣の参内を阻止すること及び警視庁を占拠してその機能の発動を阻止すること並に陸軍省、参謀本部、陸軍大臣官邸を占拠し村中孝次、磯

① 『二、二、六事件判決理由書全文とその主謀者を語る―陸軍省発表』大文字書院、一九三六年。四、九頁。

部浅一、香田清貞等より陸軍大臣に対し事態収拾に付善処方を要望すること等を謀議決定せり。・・・

（チ）対馬勝雄は同月十九日豊橋自宅に於て磯部浅一の来訪を受け東京方面の情勢を承知し相謀りて同時に豊橋市在住の同志を以て公爵西園寺公望を襲撃殺害すべきことを決定し同月二十日以後竹島継夫と共に同志歩兵中尉井上辰雄、同塩田淑夫、同板垣徹及び一等主計鈴木五郎に対しこれが参加を求めたるに板垣徹はその賛否を保留し他三名はいづれもこれを承諾し同月二三日対馬勝雄、竹島継夫および鈴木五郎は連絡のため来たる栗原安秀より東京に於ける襲撃計画および決行日程に関する決定事項の通達を受け静岡県興津町西園寺公望別邸の襲撃も豊橋陸軍教導学校の下士官約百二十名を以て同月二六日午前五時を期して決行し同人を殺害すること並に其の実行計画の概要を謀議決定し対馬勝雄、竹島継夫及び鈴木五郎は連絡のため来たる栗原安秀より東京における襲撃計画および決行日時等に関する決定事項の通達を受け静岡県興津町西園寺公望別邸の襲撃も豊橋陸軍教導学校の下士官兵約百二十名を以て同月二六日午前五時を期して決行し同人を殺害すること並に其の実行計画の概要を謀議決定し其後対馬勝雄、竹島継夫等は之が細部に関し準備する処ありしが同月二五日に至り板垣徹が兵力使用の点につき敢然反対したるため遂に公爵西園寺公望襲撃を中止し、対馬勝雄、竹島継夫は急遽上京して同志の行動に参加するに至れり。①

ファシズムと戦時体制に至る政治的激動を受けて、東屋三郎・岸輝子もまた多難な人生行路を辿る。築地小劇

① 同書。一一―一二、一四―一五頁。

場では昭和四年十二月小山内薫が病死し、政治的路線をめぐる内部対立は深刻となった。土方与志の劇場部辞任に呼応して、丸山定夫、山本安英、薄田研二などが離脱し、脚本部久保栄らも加って新築地劇団を結成する。他方残留した青山杉作、汐見洋、東山千栄子、東屋三郎、岸輝子など三十余名は、本郷座に本拠を移し、劇団築地小劇場との名称で昭和五年まで公演を続けた。① その二年後友田恭助および田村秋子が結成した築地座に、東屋三郎と岸輝子も参加するが、東屋は昭和十年地方巡業のさなかに倒れる。入院先からその病状は西園寺家へ連日報告された。

東屋三郎の急死（岸輝子著『夢のきりぬき』）

築地小劇場解散後、東屋は友田恭助さんの築地座にいて、東宝映画とも契約していた。夜遅く帰宅して、あしたの朝六時にロケーションだという、どうやって行くのというと、今乗って来た運転手に起してくれとたのんだという。そして、私の知らないうちに出かけでしまう。・・・

その三ちゃんが友田恭助と一緒に大阪公演へ行ったとき、突然貧血でたおれたという電話で、私は木村修吉郎夫妻と大阪に飛んだ。三ちゃんは意識不明で、劇場前の小児科病院にねていた。代診の先生が見ただけで、まだ院長の診察がないという。しかし、誰がなにをしたのか、往診は一切しないという阪大の医長さんがくることになった。病院ではすっかりあわてて、医長を呼んだら急に丁寧にしたした。それまでは旅役者

① 『青山杉作』六一―六六、九八―一〇〇頁。

の厄介者扱いだったのに、なにさまだろうと思っただけ。医長さんは丁寧に診察して、すばらしい体格ですとほめられた。三ちゃんはラグビーの選手だったのです。・・・

三ちゃんは時々気がつくど、どうして来たのといった。自分の病気を知らないらしい。ポーツとしていて何も分らなかった。入院料も、毎日公爵家へ病状を知らせていたという電話料も、三十分毎にした注射料も、四人の付添看護婦の費用も、大阪と東京を二度のお葬式の費用も何も知らない。木村修吉郎夫妻と私は、ベッド前にボーゼンと立っていた。

修ちゃんは三郎の奴、死ぬまで小児科で死ぬなんてどぼけた野郎だ、といった。三人は大いに笑い、大いに泣いた。①

四三歳で東屋が急逝した翌年、二二六事件が勃発し、西園寺公望の身边も緊張が漲った。やがて日中戦争の火蓋が切られ、招集された友田恭助は上海近郊で戦死する。つとに築地小劇場を離れ、左翼運動に献身しつつある千田是也は、昭和十五年治安維持法で逮捕。その秋西園寺公望は九十年の生涯を閉じ、彼の忌避した軍人内閣によって一年後日本は太平洋戦争に突入する。獄中にある千田と二年間、愛の往復書簡五十余信を続けた岸輝子は、釈放された彼と戦中ながら昭和十七年に再婚した。②

① 岸輝子著『夢のきりぬき』三八―四〇頁。

② 同書、五〇―二三一頁。